

〔研究ノート〕

## スピリチュアルに生きる人々(5)

伊田 広行

## 目次

普通の人々

タイの修行僧，藤川チンナワンソ清弘さん

小林カツ代の父

グラミン銀行総裁

働かないってワクワクしない？（アーニー・ゼリンスキー）

☆ ☆ ☆

前号に引き続き、私の提唱する〈スピリチュアル・シングル主義〉的な生き方や思想や行動に近いと思えるイメージと具体例を紹介していく。

## 普通の人々

スピリチュアルに生きるというときの基本のイメージは、実は、「黙々と日々、労働に生きる人々」にある。たとえば、毎日、農作業をしている人々がいる。黙々と働く人々の姿は美しい。インテリやホワイトカラーというのでなく、額に汗し、日に焼け、腰をかがめ、風に吹かれる。身体を使って働く。

それは狭義の肉体労働だけに限定されるものではない。たとえば、安い時給のパート労働者の多くは、朝から店や工場に出て、一生懸命働いている。ビルや街角で清掃労働をしている。人や客に偉そうにいわれ、上司や「正社員」から「下」にみられ、こき使われている。客に頭を下げ、通り過ぎる人に無視され、風景の一部に溶け込まされている。そうして自分の慎ましやかな暮らしを支え、愛する人や家族を守り子どもを育てている。

そのように黙々とまじめに働く人々の姿に、「人の営みの基準」というような、スピリチュアルなものを感じる<sup>1)</sup>。それをもう少し拡大して言えば、「金や地位」が基準なのでは

1) 私が利用する駅前（阪急南千里や緑地公園）の自転車置き場で、そこで働いておられるおじさんたちはいつも元気に「おはようございます」とか「お帰りなさい」とか「暑いねえ」とか皆に声をかけてくださる。人と人の接点が少なくなる都会でそれはなんか温かい。言われたほうは心が優しくなる。おじさんたちは別に「得する」こともないし、ぶすっとしている利用客も多いだろうに、あきらめずに声をかけ続ける。そうしたなかで序々に反応する人も増えていく。「働く」というこ

なく、自分の肉体を使い、自然から学び、自然からいただき、謙虚につつましく生きるところに、希望があるということだ。

#### タイの修行僧、藤川チンナワンソ清弘さん

タイの修行僧、藤川チンナワンソ清弘さん（泰国ポムケウ寺 比丘<sup>びく</sup>）のお話を聞くことができた<sup>3)</sup>。彼は、1941年生まれで、ひどい親や先生の下でグレて、暴力を振るったり、逮捕されたりしたような人だった。ヤクザの道にはなんとか入らず、一念発起して就職し、不動産業界で最初は違法すれすれの悪どい商売をして次第にのし上がり、バブルが膨れ上がるころには「地上げ屋」として億単位のカネを手にするようになっていった。そのなかで「金と酒と女、ゴルフ」にまみれた暮らしをしていたし、それでよいと思っていたのだが、そのようなことが続くはずがない、これでは日本はダメになるとも感じていた。そしてバブルがはじける3年前、またゼロから挑戦したくなってタイに進出しそれなりの成功を収めたが、そのとき従業員から「社長に出家なんて1日たりともできない」といわれたことをきっかけに遊び半分で一時出家をした。それが1993年、51歳のことだった。その出家経験で、いろいろあって、仏教の勉強も一生懸命して、タイの人々の深い信仰心やブツダの教えにすっかり魅了され、人間ブツダにひかれ、ほれ込んでしまった。その後一時還俗するも、寺の生活が恋しくなり、ついになにもかもをすてて本格的に出家し、修行僧となった。

私は彼の話をお聴いた上で、彼の本『タイでオモロイ坊主になってもうた』（現代書館、03年）などを読み、この人はインテリでもないし、むちゃくちゃなところもあるが、宗教の良質のかつ本質的なところをおさえているのではないかと感じた。

その一番のポイントは、彼がアタマで「あるべき生き方」を考えるようなまじめな人ではなく、むしろ逆に「金・酒・女」という世俗のきわみを通じた上で、体でホンモノを感じ取るスタイルを身に着けたところにあるように思う。特に私が強調したいのは、彼の著作やお話に出てくる日本の既成仏教批判（宗教批判）という点である。マジメな宗教者や穏健な人には、藤川さんのこの部分には、眉をしかめる人がいるかもしれない。だが、拙著『スピリチュアル・シングル宣言』など、私の〈スピリチュアル・シングル主義〉では、スピリチュアリティがたちあがるのは、まさに偽の「スピリチュアルなポーズ」との区別をつけ、スピリチュアリティを実践するというラディカルさにあることを強調した。その感覚と同じものを私は藤川さんに感じた。

「スピリチュアリティとか癒しとか瞑想とかスローとか優しさとか愛」など、きれいな

---

とのひとつの姿である。

- 2) 満20歳以上の出家で、所定の戒を受けた一人前の僧のこと。
- 3) 藤川さんの話は、04年6月に應典院と大阪経済大学で直接お話を伺ったことに加えて、彼の著書『タイでオモロイ坊主になってもうた』（現代書館、03年）、『オモロイ坊主のアジア托鉢行』（現代書館、04年）、『オモロイ坊主を囲む会』のホームページ <http://www.omoroibouzu.com> などからまとめた。

言葉には事欠かない現代社会であるが、その実、今の日本社会の現実<sup>4)</sup>は、金への執着が増大し、自然環境を破壊し、戦争できる国に邁進し、「弱者」をたたき、社会運動に参加せず、エゴと自己保身に走る非連帯的な寒々とした社会になっている<sup>4)</sup>。つまりスピリチュアリティの最も遠いところにある。そのような中で、ごまかしの「スピリチュアリティの商品」の消費が進んでいるが、だからこそ、そうしたニセモノをたたき、真のスピリチュアルな生き方を示すホンモノが求められている。ヌルイ宗教や宗教者への批判は、藤川さんなりのスピリチュアリティへの誠実さの現れである。

たとえば彼が、祖母の思い出を語るとき、次のように言う。

「小学校へ入学するとき、祖父の形見の古着を潰し、晴れ着を縫ってくれた祖母。……中学へ入学するとき、……たったひとつ残しておいた祖父の形見である金の指輪を質屋に持っていき、金をこしらえ、安堵したような、誇らしいような喜色を浮かべて、制服を揃えてくれた。盲腸で入院していたとき、体力をつけさせねばと借金までして毎日肉や卵を食べさせてくれた祖母。夜も寝ず、内職で稼いだ金で、親には内緒だといって、お菓子を買ってくれた祖母。私が留置所に入れられる度に、少しでも美味しいものを食べさせてやろうと、警察署への行き帰りの電車賃を始末してまで、私の好きな食べ物を買って、京都中の警察署へ歩いて、毎日差し入れに来てくれた祖母。……暴力を振るわれ、いつも生傷が絶えなかったのに、婿養子に迎えた（藤川さんの）父を恨むこともなく、その父が霊柩車に乗せられ、火葬場へ運ばれて行く時、病で寝込んでいたのに起きだし、人目を避けるようにして私の後ろに隠れ、『必ず浄土に行くんだよ』と目に涙をため、手を合わせていた祖母。この祖母の信仰心、特別な宗教を特別熱心に信じていたわけではないが、普通に二歩足で歩くように、毎日の食事に箸を使うように身についた信仰心は、素朴ではあるが、必死こいて修行して、ああだ、こうだ、なんだ、かんだとこねくり回して得る宗教心、少なくとも、世の中にうじゃうじゃいる糞坊主よりも、こうしてなんだかんだと文句たれてる私の宗教心よりも、はるかに上等、ホンマモン、尊いと私は思う。」（[2003] p 54-55）

また藤川さんは、宗教者ではあるが、俗っぽい神秘主義、御利益期待、などを排する。

（四条大宮のバス停で、町を歩きかう普通の人々を見て、自分のそれまでの生き方がいやになった瞬間の説明において）「日本の葬式坊主、説教タレ坊主ではなく、タイのテーラワダ仏教を十年間修行してきた乞食坊主・比丘として、この時のことを誤解を恐れず、正確に言わねばならない。20歳前、暴力団予備軍の藤川清弘が、堅気の生活が恋しくなったのは、神仏のおかげ、奇跡ではない、ということをはっきりさせておかねばならない。私が目覚めたのは、保護司が勧めた天理教や聡子の母親が誘った創価学会の御利益ではな

4) そこまでひどくなくとも、身近なところだけに関心を限定して今の秩序に安住している人が多くあっており、そうしたものと共存できる程度の「ちょっといい話」的なものがスピリチュアルなものだと思われることが多い。

い。人間でないものが『人間になりたい』と願ったわけではない。もともと人間だったものが、真人間になりたい、人間に戻りたい、と願っただけのことなのだ。それを奇蹟や神の御利益という言葉で片付けちゃ、人間・私（私の中の私）・魂とか仏性と呼ばれているものが浮かばれない。……どんな極悪人であろうとも、人間である限りは、人間になれるのだ。……神や奇蹟を待つのではなく、人間が人間として生きていける道とその道の歩き方は、2500年前からブッダというオッサンが教えてくれているのだ。」（[2003] p 38-39）

藤川さんのこうした感覚の背後には、子どものころから見てきた多くの汚い大人たちからの仕打ち、自分が京都にいるころ、汚なく金儲けをし、酒をのみ「女を買」っている僧侶を数多く見てきたこと、修行僧になったあとと四国八十八か所を乞食行でまわったときのお寺と僧侶の冷たい仕打ちの数々を経験してきたことなどがある（[2003] p 104-106）。彼はそうした中で、タイで感じたホンモノのやさしさと、日本の宗教者（教師、弁護士、警察官、NPOを名乗る輩など）の偽善やひどさとの落差に怒っているのだ。「じゃばゆきさん」を搾取する日本人たちや「自国の歴史の臭いものに蓋をしてじゃばゆきさんを眉をひそめて見る」日本人たちと、「からだを売って得たお金を家族に仕送りし、僧侶に手を合わせる心のタイ人」のどっちがまともなのかと怒っているのだ。

私は最初、藤川さんかタイで急に变化したのだろうか、人は誰でもが簡単にそのようになるものではなく、彼の何らかの資質が影響したのではないかと感じた。彼の著作を読んで、やはり彼の「考え方の癖」のようなものに、彼が世界観を転換する潜在的根っこがあると思った。

それがスピリチュアルな視点ということにつながるのだが、変化する人は、根源的に人生終わりの時点の視点、人生全体を見渡す視点で考えてしまう。たとえば彼は、金儲けの絶頂にあるとき、「俺はいったい、今、何をしているのだろうか。これじゃあ、ワル仲間と一緒に遊びまわっていた頃と少しも違いがないではないか。いったい俺は、何のために生きているのだろうか。いったい俺は何のために仕事をしているのだろうか」という声が聞こえてきたという。「妻や子を、家族を、豊かに、幸せにしたいから。金持ちになりたいから。仕事が好きだから。仕事に生きがいを感じているから。人としての務めだから」「合法的にやっているだけ」などといった言い訳に自分で「ウソこけ。どれもウソっぱちじゃねえか」とおもってしまう。彼は自分を観察し、自分が立派な人物でないこと、本当には幸せでないことを感じてしまう。自分の中にある不安、悩み、苦しみ、寂しさ、焦りなどをごまかして逃げてきたことに気づいてしまう人なのだ。自分が贅沢に生きていただけ、金と女がほしいだけのエゴな人間なのだと認めてしまう。自分を差別してきた世間を見返したかっただけではないのか。それでお前の人生は充実しているというのか、心は満たされているというのか、と考えてしまう。不動産ブームに乗って金儲けしただけであり、こんなブームは続かない、まじめに働くものが損する社会はおかしいと考えてしまう（[2003] p 160-163）。

一旦、こういうところまで見えてしまったら、あとは進むしかない。彼がタイで出家して変化していく基礎は日本にいるときにすでにあったのだ。だからタイで一旦還俗したあと、彼はそれまでの「金、酒、女」が楽しくなくなり、「商売でひと旗もふた旗もあげてやる」という上昇志向がなくなってしまったのだ。商売する気が失せ、何もかもが空しく思えてしまう。「旗をあげてどうなる、それがどうした、あの世まで持ってゆけるではなし、なんの役に立つのだ」([2003] p218)という思考回路に行き着いたら、後戻りはできない。

彼は、何もかもを捨てることで、心の平安を得たという。彼はそれまで、「金の無い男は首が無いのと一緒」と肩を怒らせ金の修羅場で生きてきた。だが、今は、服は与えられた2枚だけ<sup>5)</sup>。食事は托鉢で与えられるだけ。だからもう何も心配が要らず、心穏やかだという。心の平安(PEACE)はほとんどの宗教が目標とする価値だ。瞑想といわれるものが目指すのも、そうした心の状態だ。藤川さんの文章には、そのことがムツカシイ話ではなく——言い換えれば難解な言葉や概念でごまかすことなく——簡潔に具体的に描かれている。簡潔ではあるが、それは低レベルというのではなく、実は宗教のもっとも大事なところのひとつをうまく伝えているということである。エエカッコせず体でつかんだ「真理」って感じだ<sup>6)</sup>。

それは、彼が「悟り」というものを次のように説明するところに如実に現れている。

彼のいうところを要約すると、「悟り」とは言葉で説明することのできるものではなく、感覚的なものではあるが、少なくともいえることは、未来がわかったり、奇蹟を起こす超能力のような「何か特別な能力」が身につくことや、「普通の意識状態から離れた恍惚な状態」をいうのではない<sup>7)</sup>。特別な人だけが到達できる神秘主義的なものではなく、普通の人間でも心のトレーニングをすれば到達できる状態だという。それは、自分を徹底的に見つめ、自分のことを他人を見るように客観的にみつめるということであり、この今の瞬間を深く生きるといふことなのだ([2004] p85-101)<sup>8)</sup>。

5) 出家したとき、藤川さんは写真もすべて捨てたという。過去の自分に執着する必要が無いからという。必死でしがみついても水のようにすべては手から流れ落ちていく。つかもうと思ってもすべては変化していく。諸行無常、すべては変化していく。握っていたら苦しい。手放せばいいのだ。変化を認め、変化をあきらめ、こだわらなければいい。

6) 藤川さんは、エエカッコしない。自分は煩惱に囚われたダメな人間だという。托鉢してもらっているだけの無力な存在だという。だから偉そうなことはいえない。説教できない。ただそばにいて話を聴き、時にお経を詠むことしかできない。

7) 信じてはいけない。まず疑え。その上で実行して確かだと納得できたらそれを取り込めばいいという、ブッダの姿勢を藤川さんも強調する。

8) 私たちは小さい頃からの環境によって育まれた自分の基準という色眼鏡(ゆがみ)で見ている。それに対し、瞑想して、色眼鏡をはずし、自分の判断基準から離れて、そのままみること。ただ、今起こっていることを、そのままみること。たとえば、今の自分の心の動きや感情を第三者の目のように見つめること。どうしようもない過ぎ去ってしまった過去を嘆いたり、どうなるかわからない未来を心配するのではなく、今の時間瞬間を精一杯生きること。

また、彼は、自分の行動は、自己犠牲などではなく、逆に自分のためでしかないという。笑って死にたい（だがいつ死ぬかわからない）からこそ、今の瞬間瞬間、目の前のいやなことを減らそうとして、自分の視野に入ってきたしんどそうな人を「助ける」という。そうすると、私も相手も、皆が楽しくなるからいいのだという。東南アジアで学校を援助するのも、それによって子どもたちがうれしそうになり、それを見ていると自分もうれしくなり、そこを訪れる日本人若者も元気になり、それにお金を出した人たちもいいことにお金を使えたとハッピーになるという。

私は、彼のこうした、飾らず、神秘主義的にありがたがらせない、実践的なところが好きだ。私がこの数年〈スピリチュアル・シングル主義〉でこだわってきたのも、学問的・宗教的・哲学的な理屈のこね回しでなく、普通の言葉でいかにちゃんと伝えられ実践できるかということだったので、彼のスタイルには共感するところが大きい。

そうした彼が引用するので、ブッダの言葉も素直に入ってくる。

「諸々の愚者に親しまないで、諸々の賢者に親しみ、尊敬すべき人を尊敬すること。これがこよなき幸せである。……深い学識があり、技術を身につけ、身を慎むことをよく学び、言葉が見事であること。これがこよなき幸せである。……耐え忍ぶこと、ことばのやさしいこと、諸々の道の人に会うこと、適当なときに理法について教えを聞くこと。これがこよなき幸せである。……これらのことを行うならば、いかなることに関しても敗れることはない。あらゆることについて幸福に達する。これが彼らにとってこよなき幸せである。」（『経集』）

「愛するものから憂いが生じ、愛するものから恐れが生じる。愛するものは変滅してしまふから、ついには狂乱に帰す。世間の憂いと悲しみ、苦しみはいろいろである。愛するものに由って、ここに一切存在しているのである。愛するものが存在しないならば、このようなことは決してありえないであろう」（『ウダーヴァルガ』）

「交わりをしたらば愛情が生ずる。愛情にしたがってこの苦しみが起こる。愛情から禍いの生じることを観察して、犀の角のようにただ独り歩め。」「実に欲望は色とりどりであり、心に楽しく、種々のかたちで、心を攪乱する。欲望の対象にはこの憂いのあることをみて、犀の角のようにただ独り歩め。」（『経集』）

「托鉢によって自分の得たものを軽んじてはならない。他人の得たものを羨むな。他人を羨む修行僧は心の安定を得ることができない。たとい得たものは少なくとも、修行僧が自分の得たものを軽んじることがないならば、怠ること無く清く生きるその人を、神々も称賛する」（『法句経』）

「何人も他人を欺いてはならない。たとどこにあっても他人を軽んじてはならない。……あたかも、母が己が独り子を命を賭けて護るように、そのように一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の慈しみの心をもつべし。また全世界に対しても、無量の慈しみの意おこすべし。」（『経集』）

藤川さんが、「坊主らしくない」にもかかわらずスピリチュアルだと思う例をもうひとつ挙げておきたい。それが、子ども・養子に関する彼の感覚だ。彼はカンボジアのシェリムアップでスナーダイクマ孤児院をやっている日本人、洋子さんと知り合いになり、そこで彼女とその夫（カンボジア人）が、虐待を受けた子や両親が貧しくて学校に行けない子ら30人ほどを、自分の子どもと分け隔てなく面倒を見ていることを知る。そして、「子どもがほしいけれどできない」と嘆いている日本人に、そんなことでグチグチ言っている暇があったら、シェリムアップの孤児院にいて、その子たちの里親なり、育て親となり、心から親として愛情を注ぎ育てればいけないか、世界には親の愛に恵まれなかったり、経済的理由で不幸な子どもがたくさんいるのだ、洋子さんを見てみろ、という。「世界中のすべての子どもたちは私たちの子」と考えれば、自分の遺伝子、自分の愛する人の遺伝子にこだわって、不妊治療や代理母利用などしなくてもいいだろうという。本当に子孫がほしいなら、この地球上のすべての子どもが少しでも幸せに、健やかに育つよう、少しでも生きやすい環境を次代に残す努力をすべきだという。今この瞬間にも飢えや戦争で命を落としている子どもたちが世界中にたくさんいるのに、そのことに目もくれず、人工的にでも我が子を産もうとする行為は、我が子さえよければ、我さえよければというエゴに満ちた苦しみを招く「因」であるという（[2004] p 177-180）。

私は、この感覚こそ信じられる。

その他、彼の言わんとすることを伝えるスタンスをいくつか紹介しておく。

酒の席などでは話題が付き、場がしらけそうになったら「その場の人たちの共通の知人のうわさ話をすればたちまち場が賑わう」らしいが、藤川さんは、ブッタの次の言葉を紹介する。

『他人の過去を見るなかれ。他人のしたこと、しなかったことを見るな。

ただ自分のなしたこと、なさなかったことについて

それが正しかったか、正しくなかったかをよく反省せよ』(法句経)

その上で言う。「自分に自信を持って生きている人は、他人のうわさ話に興じて自分の劣等感をごまかすようなことはしないはずだ。うわさ話の落ち着くさきは、他人の悪口、陰口では。うわさ話の世界は妬みの心と虚栄心の入り込んだ、人間悪のゴミためみたいなものだ。他人の隠そうとしている欠点や過失をことさらほじくりあばいて、自分を慰めるような卑しい人間にならないようお互い気をつけて日々をおくろう。」

日本で宗教と聞くとそれだけで、毛嫌いする人がいる。宗教が遠いものになっており、それについてちゃんと考えていない。だが藤川さんは、「葬式と先祖供養という儀式ばかりにうつつを抜かしている仏教」を批判しつつも、「人生の目的を見失い、将来の夢がもてなくて、目先の快楽や損得に走る若者たち。仕事や老後の見通しがつかず不安におびえる人々。大人世界の縮図のような子ども世界のイジメ、少年凶悪犯罪などが蔓延する日本」

「困難な時代にただ啞然としているだけの日本」を見て、「宗教という羅針盤」「思想をもった仏教」がいるといっている。彼自身、1941年生まれで、「とにかく復興、物質的豊かさを」と突っ走ってきた戦後日本社会の申し子で、「文化、宗教、哲学」などに目もくれずに生きてきた経済至上主義の男だった。宗教を信じている人を軽蔑さえていた。まさに「日本」の典型であった。そうであったからこそ、その彼の「改心」は、今の日本人全体にとっても示唆に富むのではないだろうか。

その一例として、彼の女性との関係、セックスの問題にも言及しておこう。彼は、性欲自体を否定はしないが、自分自身が「女を性の欲望を満たす道具としてだけとりあついていた」と反省している。それは人間としてまちがっており、相手を道具として自分の欲望を処理するだけのセックスを追い求めてもいつまでたっても満足することはない、という。人間が人間らしく、性の欲望を実現するためには、互いに相手に対する信頼と尊敬に基づいた関係でなければならないという。だが今でも、「女を買う」ことを目的にタイ旅行にくる日本人男性は相変わらず多い。

お金についても同じ。日本人はすぐ「何をやるにも先立つものがある」というし、彼も以前はそうだった。だがテラワダ仏教を知って、何もかもを捨てて心の安らぎを知った彼は、お金の危険性を警告する。仏教において布施とは、自分のもっている物や知識、技術を、それが社会で必要とされ、他人の役に立つのであれば、惜しみなく分け与えることとされている。金や物を与えればいいというのでなく、本当に必要なことは何なのか、金や物に頼らない「かわり」を考えることが、金信仰に縛られてきた私たちに求められている。

「たとえ貨幣の雨を降らすとも、欲望の満足されることはない。『快樂の味は短くて苦痛である』と知るのが賢者である」(『法句経』)

藤川さんの紹介の最後に、「謙虚」について紹介しておこう。私がスピリチュアルな人であると思うのは、その人が自分をよく観察し、決して奢り高ぶっておらず、自分のダメさを見つめている場合である。ダメな自分を見つめ続けることによってのみ、スピリチュアル度を高め続ける人生が続くのだ。藤川さんは、「ひたすら修行をがんばります」「私は完璧に仏教をやっています」というのでなく、「エエカッコシーせんどこ」と思う人である。エエカッコシーをするから隠れて悪いことをするのだと悟り、ダメならダメでいい、できる限りのことを自分に正直にしようと思う人である。我が理解する「謙虚」とはそのようなものである。

「もし愚者がみずから愚者であると考えれば、すなわち賢者である。愚者でありながら、しかもみずから賢者と思うものこそ『愚者』だと言われる。あさはかな愚人どもは、自己に対して仇敵に対するようにふるまう。悪い行いをして苦い果実を結ぶ」(『法句経』)



### 小林カツ代の父

料理研究家、小林カツ代さんの父は、第2次世界大戦で中国にいたとき、中国人に残酷な行為をした上官を許さないような人だった。その上官は、戦後、帰国後、罪にも問われず、財を成し、それに取り入る人もたくさんいたという。だが、小林さんの父は、「戦友会」にわざわざ行って、その上官に「あんた、自分のやったことを忘れたんか」「命乞いしたおばあさんや赤ちゃんの顔、忘れたんか」といい続けてきたそうだ。父は酔っては、「お父ちゃんは弱虫で一人も殺せず、上官にぼこぼこにやられましたわ」、「仲良くしていた中国人一家の家を焼き払う命令が出たときははままにつらくて」と泣いていたそうだ（『朝日新聞』04年6月）。

### グラミン銀行総裁

グラミン銀行総裁、ムハマド・ユヌス氏は、米国で経済学博士号を取得後、バングラデューの大学の教員をしていたエリートだった。しかし、1976年、飢饉に見舞われた農村の救済の必要性を痛感し、計量経済学等の理論が現実の貧困な人々には何の役にも立たないと感じて大学教員を辞め、自らの資産を投じて小額無担保融資（マイクロ・クレジット）事業を開始した。その後、その事業を発展させ、1983年に「グラミン銀行」を設立し、それを成功に導いてきた。

私は、かなり前に無担保融資でもその多くはちゃんと返却されていると知って、そういうものなのだと思ったが、そのことを知り合いの大学教員たちにいうと「無担保でうまくいくはずがない」とかなり決め付けた対応をされた思い出がある。

だが現実には、抽象的な一般論よりも豊かだった。竹細工の製作・販売をしていた女性グループが、高利貸し利用のためにほとんど儲けることができなかつたなかで、ユヌス氏は最初、無担保無利子でわずか27ドルを貸して喜ばれ、それがちゃんと返却されるという経験を持った。当時、「担保がない人に融資はできない」という民間銀行ばかりだったので、ユヌス氏は貧困な人たちの保証人にもなったが、貸し倒れはなく、そうした経験から、弱者のための無担保無利子の銀行を立ち上げたのだ。貧困層、特に女性グループの人々が融資を受けられないために貧困の悪循環から逃れられないのはおかしいと考えたのだ。グラミン銀行は、借り手自身が返済計画を作ることを尊重するシステムで、返済率9割以上を維持してきた。これを通じて、借り手の46%が貧困層から脱出したという。

この例でも思う。行動し、現実を作り上げる人は、スピリチュアルである、と。それにひきかえ、後追いしかできない「過去の人たち」のおろかさ、対照的だ。

### 働かないってワクワクしない？

アーニー・ゼリンスキー [2003] 『働かないってワクワクしない？』(VOICE) (Joy of Not Working, 2001) は、私が〈スピリチュアル・シングル主義〉的な生き方として考えていることと重なっている部分が多い本だ。著者のアーニーは、失業をきっかけに、仕事と自由時間、創造性についてのコンサルタントになった人で、1日4-5時間、週4日働き、

5, 6, 7, 8月には仕事をしないことにしており, カナダのエドモントンに住み, お気に入りのコーヒーショップに出没し, サイクリング, テニス, 読書, 旅行などを楽しんでいるという。

さまざまな具体的内容が詰まっているので要約ではそのよさは伝わらないが, 彼の本が伝える中で, 一部, 私が興味深かったところを紹介しておこう<sup>9)</sup>。

まず彼がこれまで働いたことがある組織での経験に基づいて, 職場のいやだった点をリストアップした「組織(職場)がきらいな理由」がおもしろい。彼はこれらを確認することで, 仕事がないことに劣等感を持つ必要がなく, 逆に仕事をやめたことを幸運だと感じるべきだという。

その理由とは, 「リストラの結果, 仕事量が多くなり過ぎている。日がさんさんと照っているのに1日中, オフィスに縛り付けられること。上にいるベビーブーム世代が辞めないで, 少なくともあと15年は昇進の機会がないこと。10年前に首を切られているべき世間知らずや役立たずと一緒に働かなければならないこと。激しい競争, 裏切り, 作り笑いを伴うオフィス内の権力闘争。生産性は低いのに, 長く勤めているというだけで自分より多くの給与を得ている人がいること。毎日, 交通渋滞の中を片道1, 2時間かけて通勤すること。一日中, 机に向かっている(体に悪い)こと。日常業務が忙しすぎて考える時間がないこと。不必要なペーパーワーク(何の意味もないメモと誰も読まない報告書)。他の部署からの協力がなく。上司が部下に言うことと役員に言うことがぜんぜん違うこと。通常で2時間以上の会議(それでも何も決まらない)。休暇をとれと言われてもそれを拒否する仕事中毒者と一緒に働かなければならないこと。1年で一番いいシーズンに休暇を取れない, 融通のきかない休暇スケジュール。仕事が多すぎるので, 従業員に休暇の権利を全部行使しないよう求める組織。他者の努力やアイデアを自分のものにする上司。他の人の2倍効率よく働き, 予定より早く自分の仕事を終えても, 勤務時間が終わるまで会社になくしてはならないこと。官僚主義, 形式主義, ばかげた規則, 非論理的な手続き, 何もしないことが専門の無気力な人々。人種, 性別, 身体的特徴, 独身であることによる差別。自分たちは革新的だと宣伝しているのに, 革新的な人々をサポートしない組織。仕事ができる人を認め, 表彰しないこと。昇給と昇進のために身を売る, 胸が悪くなるようなイエスマンやイエスウーマンと一緒に働かなければならないこと。」

彼は, これらの特徴は多くの職場に見られ, それゆえ職場は人間の精神をだめにするが, それにもかかわらず今仕事がない人が昔の職場を懐かしいと思うなら, それこそ問題だという。このリストを見て物事を正しい角度から考えるようでありたいと, 私もある<sup>10)</sup>。

9) 以下は彼の本から抜き出した言葉を中心に, 一部私なりの要約や省略, 伊田の意見を入れてまとめている。

10) 「たいていの人は1年に1回か2回しか考えない。私は1週間に1回か2回考えることによって, 国際的な名声を得た」(ジョージ・バーナード・ショウ)

また彼は、次のような諸点からも、「働く」ということ自体に疑問を投げかける。すなわち、現代社会が定めた人生の主な目的は、労働の報酬であるお金を使ってモノを買うことであるが、モノをたくさん買うと手狭になるのもっと大きい家を買う。これを繰り返す。そんなモノに振り回される人生でいいのかというのだ。そして私たちの地球を救うためには、ビンやカンをリサイクルするだけでは間に合わない。人々を休みなく働かせるためだけに、不必要なものを作るのはばかげている。のんびり暮らし、少し働いて、少し消費する人は、間違いなく地球の環境を改善するのに重要な貢献をしている、と。

さらに彼の主張は、「所有するモノ、住む家、仕事」は重要性で言えば二次的なものにすぎず、私たちの本当のアイデンティティはモノとは別の次元にある、というように展開されていく。大事なことは、現在、私たちがどう生きているかということであり、何を学び、どれだけ笑い、どれだけ遊び、どれだけ愛を周囲の世界に注いでいるか。それこそ、人生で本当に大切なことだ、というのだ<sup>11)</sup>。

だから彼は、仕事をやめるという行動を起こすことが大切だという。多くの人は仕事や会社が嫌いでも、高い給与が惜しくて、引退するまで同じ会社で働き続けることを、避けようがないこととして選んでいる。だが、もしあなたに、「自分のクリエイティブな部分が出せないの、仕事を好きになれない」、「今の仕事を続ける上での主な関心は、年金が受け取れるようになるまでの16年間を何とかして過ごすことだ」、「最後に自分の仕事についてワクワクしたのがいつか、思い出せない」、「単に習慣的に仕事を続けているだけである」、「大学や学校が嫌いだったにもかかわらず、大学や学校に戻りたいと思う」、「月曜日に仕事に戻らなければならないため、日曜の午後5時にストレスが急増する」などという現象が見られたなら、つまり、仕事に対する熱意がなくなっていると気づいたなら、その最初の日が、仕事をやめることを考えるべきときだというのだ。またたとえ仕事が好きでも、人生で毎週50時間も時間を奪われ、ライフスタイルのバランスが失われていることが不満ならば、やはり行動を起こすときだという。

いくら金を稼いでいても生き生きとできない仕事に注いだ時間は取り戻せない。引退してから取り戻そうとしても不可能。健康を失っても取り戻せない。重要なのは、仕事の中で成長し、好きなこと、有意義なことのために、自分の能力を活用することだ。

アーニーは言う。やめようと思えば仕事はやめられる。ただ難しいだけだ。難しいだけで、絶対無理とはいえない。本気でそうしたければできる。経済的不安定といった代償は払わなければならないが、長い目で見ればやめる価値はある、と<sup>12)</sup>。

次に、アーニーは、「使命」という概念で、生き方や仕事についての優先順位を考えることを提唱する。ここは、スピリチュアルな感覚とかなり重なるところだろう。

11) 生計を立てるために人生の大半を費やす者ほど、どうしようもない愚か者はいない。(H・D・ソロー)

12) 「立ち止まることを学べ。さもなければ価値あるものがあなたに追いつけない。(ダグ・キング)

彼は言う。幸福に生きている人は、自分の使命を持っているといえる。毎朝起きるのがつらいなら、あなたは自分の使命をまだ見つけていない。人生において重要な使命を持つことは、真に生きていることを意味する。あなたの使命は、魂によって定められる人生の務めだ。あなたの真髓であり、この世に生まれた理由だ。

ベビーブーム世代の多くが中年の危機に悩んでいるのは、自分の情熱——伊田の言葉で言えば、〈たましい〉——に従ってこなかったからだ。1980年代には、たいていの人は高給の仕事を追い求め、過剰なモノに彩られたヤッピー式のライフスタイルを送ろうとした。彼らは仕事上の成功は得たかもしれない。出世のはしごを登りつめ、大量のモノを買い込んだ。しかし結婚生活は風前の灯で、子供たちは非行に走り、自分自身も過剰なストレスと不満に悩んでいる可能性が大きい。

それに対し、自分の使命を見つけ、情熱を持ってそれを追求することができれば、あなたの人生はもっと実り多いものになる。自分の使命をないがしろにすると、あなたの不満はつもの。好きなことを避けていると、精神が混乱し、体は不調になる。本当の興味や欲望を抑えつけていると、人生の痛みや不満をまぎらせるために、アルコールやドラッグ、仕事、テレビなどの中毒になりやすい<sup>13)</sup>。

「使命」といってもスピリチュアルな感覚がわかりにくい人には、同じくわかりにくいと思うが、アーニーは、次のようにそれを伝えようとする。個人の使命は、単なる目標よりも高いレベルにある。会社の本部長になるといった目標は、いったん達成してしまえば終わりだが、環境汚染を減らして世界をすみよい場所にする、というような個人的使命は、高いレベルの務めであり、全人生を通じて追及すべきことである、と。「金儲けだけが目的の仕事」や「暇つぶしのためだけの活動」は、個人の使命とはいえない。個人の使命とは、この世界によりよい変化をもたらすものだ。あなたの努力によって、人類が何らかの恩恵をこうむるというようなものが、あなたの使命であり、そういうものによって、あなたは世界と緊密に結びつくことができるという。

また「音楽家は音楽を奏でずにはいられない。画家は絵を描かずにはいられない。詩人は詩を書かずにはいられない。それぞれが安らかに自分自身でいようとするならば」という、アブラハム・マズローの言葉<sup>14)</sup>を引き合いに出して、人は誰でも自分の人生の使命を見つけることができるともいう。人生におけるあなたの使命は、あなたの価値観と関心にかかわっているので、それを見つけるためには、自分自身に「自分が情熱を傾けるものは何か」「自分の強み（弱み）は何か」「自分のヒーローは誰か」「自分が発見したいこと、学びたいことは何か」といった問いを突きつけて考えればいい。

その結果の、それぞれ各人の使命は、だいそれたものであらねばならないことはない。他人の尺度からみればささやかなものかもしれないが、それでいいのだと。たとえば、友

13) 「忙しいだけでは十分ではない。問題は、何のために忙しいかだ。」(H・D・ソロー)

14) マズローのこの規定は芸術家といった才能あるものだけのものとの捉え方もあるが、少なくともここでは、あらゆる人が自分の〈たましい〉に照らし合わせて、自分なりの才能の十全な展開をする喜びをもつことができるとの考えで、この文章をあらゆる人にとってのものと理解している。

人の父上は学校の用務員だが、彼の使命は、生徒と先生のためにもっとも清潔な学校を作ることである。ほかにも、個人の使命としては、「困っている人々の支援をするための資金を集める」、「小さな子どもたちが世界の不思議を発見できるような子ども向けの楽しい絵本を書く」「深くかかわる人間関係を形成し、それを常に刺激的で活気あるものにする」などがある。

こうした考えをベースに、この後、彼は、受身的な余暇の過ごし方ではなく、のんびりできるクリエイティブな時間のある、能動的なスロー生活、ダウンシフトした生活、仕事のない世界、一瞬一瞬を生きるスタイル（1度にひとつだけのことをする）などの積極性を提唱していくのであるが、紙幅が尽きた。続きは次号で。